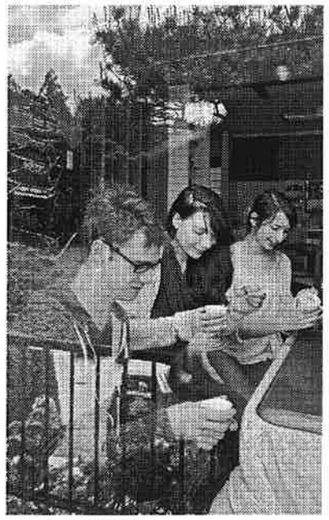
2015／05／08　15：33：47　社会部
2015／05／11　朝刊　教育　11版　S0511CK800B0000　通常版

教育

学ぶ―磨く―育てる

ニッポンで輝け



■日本茶⑤　飲むだけでなく、食べる楽しみ方もある。茶殻にしょうゆを垂らせば、あっという間に「おひたし」に。オムレツや天ぷらなどレシピは多彩。日本で学び、母てた「かぶせ茶」は、カテキンが少なく　国に戻って「伝道師」として羽ばたく。（京都府和束町）

違いを見分ける力は、日本人も顔負けだ。外国人の研修生が、湯の温度や茶葉を変えて飲み比べる。太陽光を遮って育てた「かぶせ茶」は、カテキンが少なく　国に戻って「伝道師」として羽ばたく。ぐっと甘みが増す。

「生徒化」進む大学生

従順だが向学心乏しく

就職難で安定志向■生き抜く知恵学べ

武内　清
敬愛大学特任教授

学生調査を続けている武内清・敬愛大学特任教授は、大学や授業に満足している学生が増え、大学生の「生徒化」が進んでいると指摘する。

文部科学省が次々と大学改革案を提起し、各大学がそれに対応した大学改革を実行している。その中で現代の大学生は何を考え、キャンパスライフにどのような変化が生じているのだろうか。

私たちの研究グループは、1997年、2003年、07年、13年の4回にわたり大学生調査を実施、学生の変化を追ってきた。調査ごとに対象大学は一部が入れ替わったが、直近の13年調査は14大学、1771人を対象に実施した。

このうち、4回の調査全てで対象になった7大学（首都圏、関西、九州の国立・私立大学）のデータを分析したところ、現状に満足している学生の「生徒化」ともいうべき傾向が読み取れた。

授業の出席率は、97年の62・3％から、13年の87・7％へ25ポイントも上昇した。「授業に満足している」という学生も、26・8％から49・8％へ倍増した。「学科やクラスの友人関係」や「部やサークルの人間関係」に満足している学生も、それぞれ、13・9ポイント、18・0ポイント増えた。「今の大学への満足度」も66・7％から75・9％に上昇した。

このように、現代の大学生の授業、人間関係、そして大学への満足度は上昇している。この間の大学改革や各大学の努力は功を奏しているといっていいであろう。

□□□

学生の意識も変化し、真面目で、従順になっている。13年調査では、「大学での授業で出席を厳しく取るべきだ」（45・8％）、「学生の生活や学習について、大学の先生は指導した方がいい」（17・4％）と答える学生が増えた。

これらは、大学生のメンタリティーが「生徒化」しているといえるものであろう。「生徒化」とは、他律的、受け身といった傾向であり、大人や上からの指示に従順であり素直な傾向である。

背景には、大学生の「安定志向」や最近までの就職難への防衛意識などがある。高度成長期や好景気の時のように、楽に就職ができる時代ではない。就職に役立つ資格を一つでも多く取り、将来に備えたいと考えれば、大人の指示に従順にならざるを得ない。

大学教師の意識や教え方も変わった。多くの教師は、半期15回の授業回数をきちんとこなし、学生の出席を毎回チェックし、学生の主体的参加を促すアクティブラーニング（能動的な学習）を取り入れ、学生の成長を見守っている。

こうした変化は学生の回答にも表れている。「先生が授業熱心」と答えた学生は、97年の33・8％から13年の62・4％に倍増し、「少人数・ゼミ形式の授業がある」という答えも54・7％から73・6％に増加した。

一方で、大学は「最高学府」であると同時に、社会に出る前の「最終学府」でもある。したがって、学生が社会に出て恥ずかしくない学力（漢字や分数の計算も含む）を身に付けさせ、社会に送り出す責任が大学にある。社会的マナーの教育も必要である。

その意味では、学生たちの授業への出席率の高さ、真面目さ、従順さ、つまり「生徒化」は好ましいことといってよい。

しかし、気になる点もある。確かに学生たちは授業に熱心に出席し、教師や大学に満足してはいるが、自主的な勉強や読書の時間が増えたわけではない。13年調査で、「授業の予習・復習をほとんどしない」と答えた学生は52・5％、「読書をほとんどしない」は48・7％に上る。

昔の学生は、作家や評論家、芸術家など大学外の思想家の著作から多くを学んでいた。だが、今の学生にとって勉強イコール大学の授業であり、学ぶのは大学の教師が教えるもののみである。

現代の学生は、アルバイト経験は豊富でインターネットでの情報収集にはたけているが、海外留学や旅行、合宿、遊び、学生運動など大学外の様々な経験から学ぶことが減っている。異国への旅に出ず、自分を安全な場所に置いてインターネットで都合のいい情報を集めるだけでは異文化体験はできない。

□□□

大学類型ごとの差も気になる。伝統的な総合大学では、教養教育を重んじ、学生の「自分探し」（モラトリアム志向）を支援する余裕があるが、新興大学では、就職実績を上げ、それをアピールしなければ、学生も集まらず、大学の存続が危うくなる。学生の「生徒化」に歩調を合わせるように、大学の「専門学校化」が進んでいる。

資格や採用試験合格など、学生に明確な目標を持たせ、その目標を到達するよう指導することは効果がある。しかしその目標自体が、学生が自ら選び取ったものでなければ、自主性は育たない。

学生が卒業して出て行く社会は、決して受け身で内向的な若者にやさしい社会ではない。若年層の非正規雇用が多いことが示すように、従順な若者を不当に扱い、使い捨てる社会でもある。

学生は、学生生活全般から幅広く学び、厳しい社会を生き抜くたくましさを身に付ける必要がある。それには、専門知識の習得と同時に、幅広い教養や汎用的技能（コミュニケーションスキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力）を学ばなければならない。異世代や異文化の人々と交流し、様々な体験を積み重ねなければならない。

大学の教職員は、学生の「生徒化」がもたらす光と影を見極め、学生に時に手を差し伸べ、時に厳しい試練を課していかなければならない。

挑む

生活習慣改善の機会に

新4年生にとって初めてのクラス分けテストを実施した。これまでは「赤組」「青組」というように、単に入塾時期の違いでクラスを分けていたが、4年生からは成績順に約25人ずつ1組から8組に再編成する。

一人ひとりにクラス通知書を配ると、小さくガッツポーズをする子もいれば、しょんぼりと下を向く子もいる。

「今回は成績順じゃなくて、体脂肪率の低い順にクラスを分けました」と冗談を言うと、「え～、絶対ウソだ～」「どうやって測ったんだよ？」と蜂の巣を突ついたような騒ぎになる。

ほぼ全員が体脂肪率という言葉を理解していることに驚かされたが、それどころか、「個人情報は公開されないんだよ！」などと生意気を言う子までいる。

今回は、出題範囲を決めない算数と国語の2教科だけのテストだから、努力の証しというより、単にテスト慣れしているかどうかで決まったようなものだ。小学校受験の経験がある子が、毎日サッカー漬けの子よりも有利なのは明らかだ。

「だから、要するに体脂肪率と同じで、これまでの生活習慣の違いだけなのさ。でも、次のテストからは、この1カ月の勉強の成果でクラスが決まる。今回体脂肪率が高かった子は頑張って毎日トレーニングすることー」というと、しょんぼりしていた子も笑顔を取り戻してくれた。

その夜、成績が悪かった子の家に励ましのメールを送ると、すぐに返信が届く。「息子が『メタボになら ないように頑張る』と訳の わからないことを言って張り切っていたのは、そういうことだったんですね。ありがとうございます。それより主人が『毎日仕事から帰ってからあんなに特訓したのに』と落ち込んでいて……」

体脂肪率は1、2週間特訓したところで、下がるものではない。すぐに結果につながらなくても、日々の生活習慣を改善することが大切なのだ……と、再度スポーツジムに通い始めた自分にも言い聞かせた。

ポイント

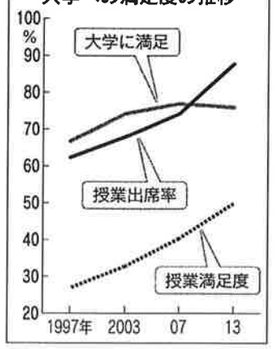
中高の延長線上 出席しても私語

「最近の学生はしっかり授業に出ている」「まじめな学生が増えた」「就職活動に前向きに取り組む」――。大学で、こんな話をよく聞く。だが、その一方で、教室に出てきても私語が絶えず、携帯電話をいじったり、居眠りしたりする学生も少なくないと嘆く教員も多い。

従順ではあるが、向学心にいまひとつ欠ける若者たち。そこにいるのは、一人の大人として学問に向き合う「学生」ではなく、中学・高校の延長線上にいる「生徒」である。そうした「生徒」たちと正面から向き合うことが、進学率が50％を超えた時代の大学には求められている。

（横一）

大学への満足度の推移

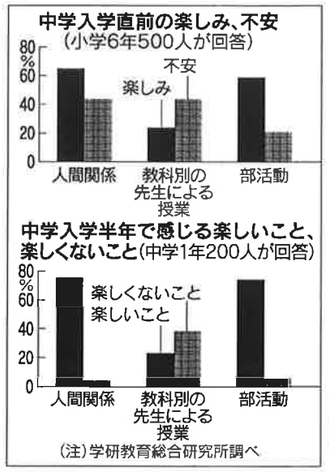


データ

中学の友達と「楽しい」75％

学研教育総合研究所（東京）が昨年、中学校入学直前と入学半年後の子供にそれぞれ期待や不安、学校生活の楽しさなどを聞いたところ、「新しい友達などの人間関係」を入学前は43％が不安視していたが、半年後には75％が「楽しい」と答えた。一方、入学前に43％が不安を感じていた「教科別の先生による勉強」については入学後も38％が「楽しくない」とした。

昨年3月に小学6年生500人、同9月に別の中学生200人に調査した。入学後の「部活動」は74％、「先輩との関係」は42％が「楽しい」と感じており、担当者は「多くは新たな環境に適応しているが、難易度が上がる授業をつらく感じる生徒もいるようだ」とみている。



（注）学研教育総合研究所調べ